

「ポーランド孤児救出の感動秘話」

平成 30 年 6 月 24 日（日）

今村 忠男

1、 孤児を生み出した背景

他国からの侵略】

民主的な国ポーランドでしたが、十八世紀に入り、三度も他国に支配され、幾度も自由を求め立ち上がりますが、いずれもロシアに鎮圧されました。ロシアはこうした反乱を受けて、政治犯や影響力の強い危険分子をへき地に送り込み排除します。その行き先の一つがシベリアでした。

シベリアで行き場を失ったポーランド人】

シベリア開発のため、流刑者が多く送り込まれました。これら流刑者の捕虜たちを慕ってその妻や家族、恋人たちがシベリアにやってきて一緒に生活を始めました。そして、その子供たちがシベリアの地に誕生しました。

また第一次世界大戦で、ポーランドを追い立てられたポーランド人は難民となり、東へ東へと逃げシベリアまで流浪の旅を続け、家族と離ればなれになった子供たちも多く出ました。このため、元々現地で生活していた人々も含め、シベリアのポーランド人は一気に十五～二十万人にも膨れ上がりました。

さらに混乱に拍車をかけたのがロシア革命（1917 年）であり、“捕虜になったチェコ軍を救出する名目（借金を無きものにしようとしたことや共産主義革命阻止が主であった）”で連合軍（日本やイギリス、アメリカ、フランス、イタリア）のシベリア出兵でありました。各国の出兵により、シベリアでは内戦と干渉戦が同時進行するという複雑な事態となりました。その混乱の中で、シベリアのポーランド人たちは行き場を失って各地を流浪し始め、親と死別した子供たちは飢餓と疫病にさらされ、極寒の中で次々と倒れていきました。

2、 支援を求めポーランド人が立ち上がった

ポーランド救済委員会】

こうした同胞の窮状を見かねて難民救済に立ちあがったのが、ウラジオストックにいたポーランド系住民で 1919 年に“ポーランド救済委員会”を設立しました。

救済委員会は、当初ポーランド人難民全体の救済・支援を目指していましたが、自力では生きていけない哀れな孤児があまりにも多いため、救済のターゲットを孤児および救助を必要とする児童に絞り、新生ポーランドの将来を担う子供たちの救済を活動の中心に据えました。

救済委員会は当初、アメリカの赤十字社に頼み活動をしていましたが、反革命軍が破れ各国のシベリア出兵は異議を失い、アメリカは帰国しました。それにともなってアメリカ赤十字社も帰国してしまいました。また、救済委員会の資金もルーブルの暴落などにより底をつき、孤児収容施設の所有者から立ち退きを迫られるようになりました。加えて独立を果たしたばかりのポーランドは、ソビエトと戦争を始めたので、シベリア鉄道で孤児たちをポーランドに運ぶことができなくなり八方塞がりになりました。しかし、幸いというべきか、各国が撤退したあとも日本軍だけはまだ駐留しており、ウラジオストックもその支配下にありました。万策尽きた救済委員会は日本に支援を依頼することに決めました。

ポーランドの窮状を訴える】

救済委員会の会長ビエルケヴィチは、単身来日し外務省を訪ね訴えました。会長の話を聞き、文章にして外務大臣宛に提出するようにアドバイスしました。その嘆願書と状況報告書が残っています（外交史料館）。

その内容の一部ですが、「もうすぐ冬になりますが、このままでは死ぬほかない子供たちを救い出すには至急の対応が必要なのに、それができない境遇にあります。わたしは、子供を可憐な花のように慈しむ美しい日本国が、大戦のため不慮の災いを受けるに至った当孤児院の罪もない子供たちに、温かい援助と救護を与えてくれることを信じて疑いません。」また状況報告書には、「シベリア鉄道には過激派（赤軍）が来る前に避難しようとするチェコ軍やイタリア軍などの連合兵士が殺到し、軍人同士が座席の確保をめぐって争い、多くの避難民は兵士たちによって走る列車から雪の中に投げ捨てられた。」とありました。

あまりの悲惨さに日本政府は深く同情し、人道上からも見過ごすわけにはいかない。しかし、シベリア出兵で資金がなかったため、日本赤十字社に救済事業を引き受けて欲しいと要請しました。協議の結果、「本件は、国交上ならびに人道上まことに重要な事件にして救援の必要を認め候につき、本社において児童たちを収容して給養いたすべく候」と、会長が来日してわずか十七日目の異例の早さでの決断でした。まだ、外交官の交換もしていない状況下での即断は驚くべきことであつた。

こうして孤児救出作戦が始まりました。

3、 日本国民の愛

温もりの力】

ポーランド孤児の救護が始められたのだが、この時の模様をポーランド救済委員会副会長ユゼフ・ヤクブケヴィッチ医師が次のように回想している。

「日本人は日本内地においても我々を援助してくれたばかりでなく、シベリアにおいても等しく援助してくれた。異郷の地であるシベリアにおいて日本陸軍の保護の下

に我が児童を輸送してくれた」と。

かくして孤児輸送が始まり、ウラジオストック港を出航し、敦賀港に入り、列車で東京へ向かい、日赤本社病院に隣接する福田会育児院に収容された。



ウラジオストックに集まった孤児たち

収容された孤児の総数は三百七十五名。これに付き添いの大人が三十三名。児童の最年長者は十六歳で、最年少者は二歳であった。

まず、案じられたのは衣料だった。ほとんどの子供が破れた服を着、穴の開いた靴を履き、中には裸足の子供までいた。日赤はすぐさま、衣料を新調して子供たちに与えた。さらに民間による支援も多くあった。さっそく慰問の人々が訪れ、菓子やおもちゃなどの差し入れをし、優しく「辛かったろう、苦しかったろう、悲しかったろう。でも、もう大丈夫だよ。なんの心配もいらないんだよ。君たちに辛くあたる者も、君たちを悲しませるような者も、この国には一人もいない。だから、安心して過ごなさい。そして早く元気になるんだよ」と。

孤児たちのもとへ詰めかけたのは、慰問の人々だけではなく、新聞記者たちも殺到した。カメラを向け、次から次へと質問した。子供たちは通訳を通じて丁寧に答えたが、親のことを聞かれたときは花がしぼむように沈黙した。そして両手を合わせて首

を傾げ、あとははらはらと涙をこぼした。後悔したのは記者たちだった。しまったという表情で顔を伏せ、すまなかったねと頭を下げた。その拍子に思わず涙がしたった。それほど子供たちは無垢で純粹だった。涙した記者たちは、互いに励まし合って、「好い記事を書こう。この子供たちのことを世界中が知ってくれるような良質の記事を書こう」と。

記事の後押しもあってか、国民の寄贈品や寄付金も増えた。団体の慰問も尽きることなく、動物園や博物館見学や一泊旅行などが行われた。また、無料で歯科治療や理髪を申し出る人たちが多かった。



福田会育児院の孤児たち

心の力】

少女の回想から次のようなこともあった。少女は皮膚病を患い、鼻以外は包帯で全身をグルグル巻きにされていた。日本にきて最初に出会った看護婦に、鼻にキスをされたことがあった。そのキスが少女にとって初めての人の愛・温もりを感じるエピソードであった。また別の少女では、「特別に痩せていた女の子は、日本人医師が心配して、毎日 1 錠飲むようにと特別に栄養剤をくれたが、大変おいしかったので、一晩で仲間に全部食べられてしまった」という、エピソードもありました。

しかし、問題も生じた。シベリアでの栄養失調が祟って感冒や百日咳などの病気が蔓延したことだった。深刻だったのは、大正十年春に引き起こされた腸チフスの感染であった。次々に感染して二十二人にもおよび、医者や看護婦が必死に手当てをし、なんとか二週間で回復したものの、ひとつの悲劇が待っていた。

二十三歳の看護婦松沢フミの感染だった。フミは昼夜の別なく、病に罹った子供た

ちの看護にあたった。周りがどれだけ止めても休もうとはしなかった。「人は誰でも、自分の子や弟や妹が病に倒れたら、おのが身を犠牲にしても助けようとします。けれど、この子たちには両親も兄弟姉妹もいないのです。誰かがその代わりにならなければいけません。私は決めたのです。この子たちの姉になると。」そして、腸チフスに罹った子供に対して、「この子はやがて死んでしまう。どうせ死ぬのならせめて私の腕の中で死なせてあげたい。」と、その子のそばを片時も離れずに看病しました。すると、フミの真心が通じたのか奇跡的に助かったのです。そのかわり、フミは腸チフスに感染し亡くなりました。

その死を知らされた子供たちは号泣しました。とくに看病された子たちの悲しみは深く、しゃくりあげ、声が枯れるほど泣き、やがて声すら出なくなるほど、涙が出なくなるほど、悲しみ続けました。



松沢フミ

アリガトウ】

大阪での歓迎ぶりもすごかった。子供たちが一番喜んだのは、動物園の園長の取り計らいで、象の背中に乗せてもらえたこと。子供たちにとって初めて体験であった。動物園の帰り、子供たちは覚えたばかりの日本語で「アリガトウ」と口々に礼を言った。園長だけでなく、ほかの大人や子供たちと、市民は家族として子供たちを迎え入れたのであった。

皇后のお言葉】

貞明皇后が行啓されたのは、大正十年四月十六日。子らをお側近くに召され、中で

も四歳になるゲノヴェヘ・ボクダノビチオの頭を撫でられた。彼女の父親は赤軍に捕らえられ、母親は遺書を残し自殺した。ゲノヴェハは四日間、木の実を食べて放浪している所を救済委員会に救われた。

皇后陛下は、ゲノヴェハの運命の痛ましさに溢れんばかりの涙を堪えられ、自愛深き顔で、このようにお言葉をお掛けになりました。「ゲノヴェハさんと言われるのね。ゲノヴェハさん、あなたは一人ではありませんよ。あなたが、ここに来られたのは、あなたのお父様やお母様が、わが身を犠牲にしてお守りくださったのですよ。この度も、入院なされたのですね。でも、あなたはこうして無事に退院することが出来ました。だから、一所懸命に生きてゆくのですよ。決して命を粗末にははいけませんよ。大事になさい。そして、健やかに生き立つのですよ。それが、あなたを守って下さったご家族と、この病院の方々の願いなのですから」と。



貞明皇后

別れ

横浜港や神戸港から出航する時、幼い孤児たちは親身に世話をしてくれた日本人の看護婦や保母たちとの別れを悲しみ、乗船を泣いて嫌がるほどでした。苦難に満ちたシベリアでの生活を過ごした孤児たちにとって、これほどまでに温かく親切にされたのは、物心ついてから初めてということも多かったのでしょう。彼らは口々に「アリガトウ」など、覚えてたの日本語を連発し、「君が代」などを歌って感謝の気持ちを表わします。帰る子供たちも、大勢の見送りの日本人たちも、涙を流しながら、姿が見えなくなるまで手を握り続けたのでした。



神戸港からの帰国の様子

4、その後のエピソード

日本の領土に戻ったのだ】

その後も、ポーランド在住の日本人と元孤児たちの交流は続いており、ある時、元孤児の方々を大使公邸に招くことになりました。平成七年十月に八名の元孤児の方々が公邸にいらっしゃいました。その当時でも皆さん 80 歳以上のご高齢です。家族の付き添いでようやくお越しになれたご婦人もいらっしゃいました。

大使は、彼らを迎えてこのように挨拶しました。「ようこそお越しくございました。国際法という法律では、日本大使館と大使公邸は小さな日本の領土とも考えてよい場所です。ここに皆さんをお迎えできたことを、本当にうれしく思います」すると、皆さん「ああ、私たちは日本の領土に戻ったんだ」と本当に感激されて、その場所に跪いて泣き崩れられたのです。そして、ひとりのご婦人が、こうおっしゃいました。「私は生きている間にもう一度日本に行くことが生涯の夢でした。そして日本の方々に直接お礼をいいかけた。しかし、もうそれは叶えられません。ですから大使から公邸にお招きいただいたと聞いた時、這ってでも伺いたいと思いました。しかも、この地が小さな日本の領土だと聞きました。今日、日本の方に、この場所で私の長年の感謝の気持ちをお伝えできれば、もう死んでも思い残すことはありません」と。

皇室の訪問】

今上天皇と美智子皇后（当時）が、ポーランドを訪問した際、東洋の島国日本が、かわいそうな孤児たちを助けてくれたという話をずっと伝えてくれており、大歓迎でした。

この時、老婦人が天皇皇后両陛下に謁見を許されました。彼女は、美智子皇后の手を離さず、ずっと握りしめたままだったそうです。実は、彼女は日本に連れてこられた元孤児だったのです。その時、慰問に訪れた貞明皇后に声をかけられ、頭を撫でられたといひます。おそらく、彼女にとって、この貞明皇后の温もりこそが唯一の肉親のような温かさだったのではないのでしょうか。それを確かめるために、再び、美智子皇后の手を握って離さなかったのではないのでしょうか。



この彼女が、亡くなる前に残した言葉が、「日本は天国のような所だった」でした。